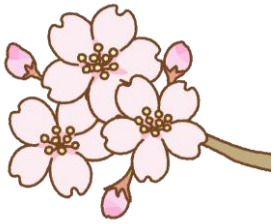
令和４年３月

教育センターだより

令和３年度　第３号　　黒部市教育センター

「桜切るバカ、梅切らぬバカ」

黒部市立明峰中学校
校長　　松　島　　悟



今年の桜の開花予想は平年並みの４月上旬と発表されています。春の花といえば桜や梅を思い浮かべる方も多いと思います。表題の言葉は、桜や梅にちなんである先生に教えていただきました。植物に関心がある方はすでにご存じかもしれませんが、自分は初めて聞く言葉で、ちょっと興味がわき自分なりに調べてみました。

桜は枝を切ると花が咲かなくなるだけでなく枯れてしまうことがあり、梅は反対に枝を切らないとよい実がつかないところからきている。同じバラ科サクラ属の落葉広葉樹でありながら、桜は切り口から腐りやすいので枝を切ることは避けるが、梅は枝を切ると切り口から小枝が密生し、枝振りがよくなり、よく伸びて花をつけ、実を結ぶ。つまり、「桜切るバカ、梅切らぬバカ」という言葉の意味は、樹木にはそれぞれの特徴や性格があり、その特徴や性格に合わせて世話をしないとうまく育たないという戒めでもある。

この言葉を、教育に例えてみました。学校教育や家庭教育でも、子供に対して桜のように自由に枝を伸ばしてやることが必要な場合と、梅のように手をかけて育ててやるのが必要な場合があります。これを取り違えてしまうと、社会にうまく適応できないことが起きるかもしれません。子供が好奇心をもって「これがやりたい！」と言っているのに、教師が「ダメ」と言って子供の心を腐らせてしまったり、子供がやってはいけないこと、子供にやらせてはいけないことを放置して、子供を間違った方向に導いている親がいたりと、現代の社会にも十分通用する言葉だと思います。

ちなみに、木の枝を切って樹木の形を整えることを「剪定」といいます。剪定というのは単に枝を切ることだけではないそうです。一本一本の樹木はそれぞれ違う心をもっています。樹木の意欲を損ねないよう、樹木の反発をなるべく小さく収めるよう、樹木の伸びたい気持ちを聴きながら、樹木の勢いをなだめながら、伸ばしたい方へ誘導していくそうです。剪定のプロの極意は「いかに枝を切るかではなく、いかに枝を切らないか」だそうです。

子供のよいところは子供のやる気や自由に任せてどんどん伸ばしてやり、逆に、子供の未熟なところは「悪いから」といって切り捨てるのではなく、梅の剪定のように、子供の「個性」として伸ばしてやるように、将来を見据えて社会生活に役立つ教育に繋げていきたいものです。いずれにしても、親や学校の教師は「子供は一人一人違う」ということを十分理解し、子供一人一人を尊重し、いかに個性を伸ばしていくかという教育を心がけることが大切です。

最後に、梅も桜も剪定するかどうかは別にして、毎日見てやることが最も重要だといいます。園芸家によると、毎日見てやっていれば梅も桜もよい花を咲かせて長生きするということです。

私たちも、毎日学校で一人一人の子供をしっかり見守り、それぞれの個性を育み、伸ばしてやりましょう。

校長から学ぶ

教職生活を振り返って

黒部市立清明中学校
校長　愛　場　幸　男

平成元年、私の教員生活がスタートしました。すでに講師経験があり、ある程度仕事内容は分かっていましたが、毎日が大変忙しくただただ目の前の仕事と向き合う毎日でした。夜帰宅するのが遅かったり、部活動指導で土日も勤務したりすることが多かったので家族に心配をかけました。

経験を重ね、仕事に慣れてくると、生徒から教えられることが多いことに気付きました。生徒とのやりとりの中から、学習についての質問を受けたときは、授業改善のヒントをもらいました。部活動で悩んでいる生徒と面談したときは、技術を教え勝利を目指すことだけではなく、部活動を通して何を学ばせたいのか考えさせられました。問題行動のある生徒と面談したときは、その言動の本質が何に起因するのか、その解決方法の困難さに悩んだこともありました。ここで経験したことすべてが、今の私の財産となっています。

これまでの生徒たちは、今は立派に成長し社会の第一線で活躍しています。中には、保護者として、或いは地域住民として学校を支えてくれています。これは、教員としての最大の喜びです。私の教員生活は残り少ないですが、もう少し、皆さんのお力になれればと思います。今まで共に学んできた生徒の皆さんや私を支えて下さった保護者や地域の皆さん、そしてともに生徒と向き合い、助言をいただいた先生方に感謝したいと思います。

一期一会

黒部市立たかせ小学校
校長　髙 岡　　薫

今、長い教員人生を振り返ってみると、自分の原点において大切な出会いがあったことに気付きました。

「小学校の先生になりたいです」
北日本新聞の「ぼくの夢わたしの夢」に、自分の記事が掲載され、自分の夢について初めて語った場面でした。それまで「先生になろう」と漠然と考えていましたが、小学校６年の担任の先生との出会いによって、自分の心の内が明確になった瞬間でした。
旧新湊市に生まれ、放生津小学校に入学したのは、今から５０年以上前ですが、その頃の学校の様子を今でも鮮明に覚えています。放生津小学校は、幼稚園を併設した大きな敷地にあり、体育館、講堂、三棟の校舎、ロータリーとなっている中庭、遊具がいっぱいのグラウンド、毎日いい匂いがする給食室、さらに同級生は常に２００名近くいて５、６クラスでの学校生活。今思えば、本当にビッグな環境だったと思います。学習環境だけでなく、人的環境においても。職員室や保健室が広く、担任の先生に頼まれた用事をこなすのに、ずいぶん時間を要した思い出があります。私にとって小学校時代は、まさに友達や先生との一期一会の場でした。

そして、教職に就いて１年目。勤務先で出会った先生方から、多くことを学びました。当時の教頭先生から、次のように印象的な言葉をいただき、今も心の支えとなっています。
「教師は役者であれ、医者であれ」
教師として子供の前に立つためには、心と心を通い合わせる声かけ、寄り添い等、時には役者のように、笑いあり涙ありの魅力的な存在であるように。また、子供の顔色、表情を見ただけで、体調やメンタルの面を見抜く力をもっている医者であれ。
「先生を好きになることが、子供にとって一番の幸せ」
担任の先生が好きならば、子供は自然に成長していく。「先生を好き」と思わせることが、何よりも大事である。子供が自分を好きになってくれるように、自分の人格を磨け。一緒に遊び、一緒に笑い、一緒に伸びていくことが大切である。
「学年主任のクラスを見て、学習環境を真似しろ」
掲示板に何が張られているのかを真似することではない。子供たちが朝教室に入ったときの様子、休み時間や授業中の雰囲気、子供が帰ってから担任が一人で整える教室環境。これらすべてが学習環境である。学年主任の行動や気配りをしっかりと目に焼き付けろ。

教員としての第一歩を踏み出す私に、教員としての当たり前を教えてくださった先生方。当たり前を当たり前にこなすことこそ難しいと感じている私に、「教員は５年が勝負だ」「５年で自分の財産を身に付けろ」と励まし続けてくださいました。初任からの５年間で身に付けたこと、それはいったい何だったか。子供たちや先生方一人一人との出会いによって営まれた毎日の生活であると考えます。
昨今のコロナ禍により、何気ない毎日の生活がどんなに幸せなものであるか、改めて感じておりますが、私の教員人生も、子供たちと真剣に向き合った日々が宝物と言えます。教員として子供たちに関わることの素晴らしさを再認識する中で、出会った子供たち一人一人に、出会った先生方一人一人に感謝申し上げます。

教職生活を振り返って思うこと

黒部市立村椿小学校
校長　弥 生　優

私は、今年度の終わりをもって「定年退職」となる見込みです。大きな節目を迎えることになります。教員として、子供たちに対して「節目には、これまでの自分を振り返り、次の目標をもつように」と諭してきましたが、今は自分自身に求められていることであり、これまでの振り返りを元に、今後の自分の有り様を考える時に立たされています。

私はこれまでどのように仕事をしてきたのだろう、と思い起こしてみると、正直、何も成し得ていないという自覚があります。ただ一つ、定年退職というところまで仕事を続けてきたことだけが「為し得たこと」かなと思う次第です。

愚鈍であるという自己評価が自分の中にあり、記憶する力、関連付ける力、解を導き出す力等が弱いという自覚があります。ですから、公私ともに問題解決のために、ずっと「どうしたらよいだろう？」と考え続けてきたように思います。そのため、教職に関わる部分では、自分の能力の範囲内で教育に関する様々なことに目を向け、調べたり教えてもらったりしてきました。ある時期には、いわゆる教育書を買い漁り、年間10万円以上も書籍を購入していたことを思い出します。前述した弱い部分が影を落とし、ほとんど無駄になっていたような気がしますが…。

このような中、興味を覚えたのは「認知心理学」と「発達臨床」でした。前者については、授業における子供の理解を引き出すことにあぐねる中、光明を見いだせそうだと感じたことからハマったものです。後者については、私に「転機」をもたらしたものであり、今で言う特別支援教育への誘いがあって目を向けることになり、認知心理学とも相まって、これにもハマることになりました。興味･関心をもったことについて勉強したり携わったりすることには何の苦労も辛さも感じることがなく、反対に、愉しく没頭できる時間を過ごすことができました。このことがどれだけ子供たちへの指導に生かされたかは、結構な疑問が残るところではありますが、何も勉強しない自分が教壇に立つよりはきっとよい影響を与えたと思っています。

現役の先生方には、経験豊富であっても分からないことやうまくいかないことがあるのではないかと思います。とりわけ経験の浅い先生方においてはなおさらだと思います。「どうしたらよいだろう？」と、謙虚に愚直に求め続ける中で何かしらの手応えと愉しさを見いだせたら、先の道がさらに大きく開けるのではないでしょうか。

学校勤めをする私たちには、目的を同じにするたくさんの先輩や後輩、あるいは同期の仲間、そして、上司がいます。現在の自分の手に負えそうにないことには、必ず周りからの助けがありますから、大いに頼ればよいと思います。

私自身、数え切れない導きと助け、時には鞭撻をいただいてきたおかげで、現在があります。ですから、今もそうですが、いよいよ退職となるその日の終わりには、これまで私に関わってくださった方々への感謝の念で胸をいっぱいにすることと思います。これまで、本当にありがとうございました。

ところで、退職した後どうするのか、私は目標をもたなければなりません。

私にはなすべきことややりたいことがいくつもあります。例えば、親の世話、自宅敷地の果樹にたわわに実を付けさせること、能面を作る面打ち、日曜大工、釣り、プログラミング、国内外への旅行、料理の腕前を上げること、等々たくさんあります。どこまでできるか分かりませんが、取り組んでいきたいと思っています。

今後も「どうしたらよいだろう？」と考え続ける毎日が続くことと思います。

「感〇」いっぱいの一年間

黒部市立桜井小学校
校長　籠　浦　智　彦

令和４年の幕開けであった１月１日、dTVで鬼滅の刃を見ました。煉獄が残した最後の言葉「己の弱さや不甲斐なさにどれだけ打ちのめされようと心を燃やせ、歯を食いしばって前を向け」にドキッとしました。と同時に煉獄が、私に語りかけてきました。「籠浦、38年間の教員生活、私(煉獄)のことばどおり全うしたか？」と…。

昭和59年度教諭としてスタートし、教頭、市教セ所長、校長、東教事主任生活指導主事・主幹(班長)・管理課長次長・所長の８つの職を経験しました。それぞれの立場で、多くの方とのネットワークができ、多くのことを学びました。

「事務ではなく仕事をする」
「本質を見失わない」
「現在、自分のやっている仕事が、将来どのような影響を及ぼすか考えて職務にあたる」

自分のまわりにいる教職員の職務の様子を見ていると

「自分の仕事は後回し。他者からの仕事や相談を優先し、全身全霊で対応する〇〇者」
「３K【慣行どおり、勘、経験】のみに頼らず、現状に適しているかどうか疑いの目で見る〇〇者」
「ロジックツリーの考え方で、なぜ、なぜ、なぜと掘り下げて具体行動案を立てる〇〇者」

なんだか自分に似ているなあと思い、ついその教職員をいじりたくなった一年間でした。

私は、今年度の４月に桜井小に着任し、「機関勤務の成果を、桜井小学校を核にして、黒部市教育に還元する」と黒部市教育センターだよりに書きました。

どれだけ還元したかは別として、令和の意味「黒部市の教育に携わっている子供たちや教職員が、明日への希望とともに、花を大きく咲かせることができるように」と願いをもって、日々、仕事にあたっていたことについては、人並みにもっていたと自己評価しています。言い方は悪かったなと反省の念を込めて…。

ただ、言えるのは、退職を迎える最後の年、桜井小学校に勤務できてよかった。黒部市に勤務できてよかった。なぜなら、〇〇者がたくさんいたから、そして「感〇」の熟語(感動・感謝・感激・感涙等)をたくさん味わわせてもらったから…。ありがとうございました。

最後の日、みなさんの顔がぼやけて見えるかもしれません。３月末日の天気予報では、春の霞がかかり、花粉が多く飛び交うと言っているから…。

教職生活を振り返って思うこと

黒部市立荻生小学校
校長　佐　竹　康　子

今、３８年間を振り返ってみると、よく定年まで教員を続けてこれたなというのが実感である。支えてくれた家族や同僚、励まし手助けしてくださった周囲の皆様のおかげだと思う。苦しいことや辛いことがたくさんあったはずなのに、楽しかったことやうれしかったこと、おもしろかったことの方が思い出される。

①「生き方を考える･･･道徳の授業っていいですね」

富山市の中学校で教員生活は始まった。２週間の教育実習以外、授業をしたことがなく、教育についてたいした知識もなかった私は何も分からず、何もできなかった。初めて授業を公開した校内研では「空振りの授業」と酷評され、先輩の道徳や学活の授業を参観してもどこがよいのか分からなかった。次の校内研では、学年の先生方が会議を開いて構想を練るなどみんなでバックアップしてくださり、学年主任の先生が手取り足取り学活の指導案作成を手伝ってくださった。授業後、学級会長が「先生の授業、初めて分かった」と言いに来た。道徳はその後も試行錯誤だった。数年後、ある生徒の道徳ノートに①のコメントを見て、少しほっとした。教科の授業とは違って、生徒と一緒に考える中で生徒と深くつながったような感覚がうれしくて、いつの間にか道徳の授業が好きになっていた。

②「怖くないけれど逆らえない先生」

滑川市の中学校で８年間働いた。富山市でも滑川市でもすばらしい先生方に出会い、たくさんのことを教えていただいた。あんなふうに生徒や先生方に信頼される素敵な先生になりたいとよく思った。憧れの先生のまねをしたり、直接、指導のコツを聞いたりした。形だけまねをしても、全然うまくいかなかった。ある日、先輩の先生から「教室、落ち着いとるね。生徒たちに聞いたら『（担任が）怖くないけれど逆らえんから』って言っとったよ」と言われた。理想の先生にはなれないけれど、生徒と一緒に悩んで考えながら、少しずつでも生徒に必要とされる教師になっていくべきなのだと自分の中で折り合いをつけた。

③「こんなに勉強しなくて大丈夫ですか」

黒部市で印象深いのはやはり、国際化教育である。ＹＫＫのお膝元であり、古くから帰国児童生徒教育や外国人児童生徒教育に力を入れ、自立と共生を軸に幅広い教育活動が展開されていた。英語教師の私は、必然的に国際化方面の校務分掌の担当となり、海外から戻ってきた生徒や保護者に接する機会も多かった。③はそんな保護者の一人から言われた言葉である。アメリカ在住の頃、生徒は毎日現地校へ通いながら、土日には補習校へ通い、家でも課題をこなすため、必死に勉強していたという。それは、日本人だからではなく、現地の中学生も同じだったとのこと。日本へ帰国した途端、家で学習する姿を見なくなった。とても心配しているとのことだった。数年後には、日本でも家庭学習に力をいれようという波がやってきた。国際化教育は世界の流れを見る窓のようだと感じた。流れの先が見えてくるのだ。最近、大きく取り上げられている「主体性」は 10 年ほど前、英語学習で大々的に取り上げられていた Autonomy（主体性）と同じだと思う。同時期に「自律的な学習者の育成」が騒がれていたが、今年度の「あしすと」に「自律的に学び進められる子供の育成」という文言を見付けたとき、やっぱり波がきた、と思った。黒部市はもう違う方向に舵を切っているのでこれまで同様という訳にはいかないだろうが、この窓は大事にしてほしいと思う。

こうしていると蘇る様々な思い出。これまでに教師として出会った全ての子供たち、全ての方々に感謝の気持ちを伝えたい。本当にありがとうございました。

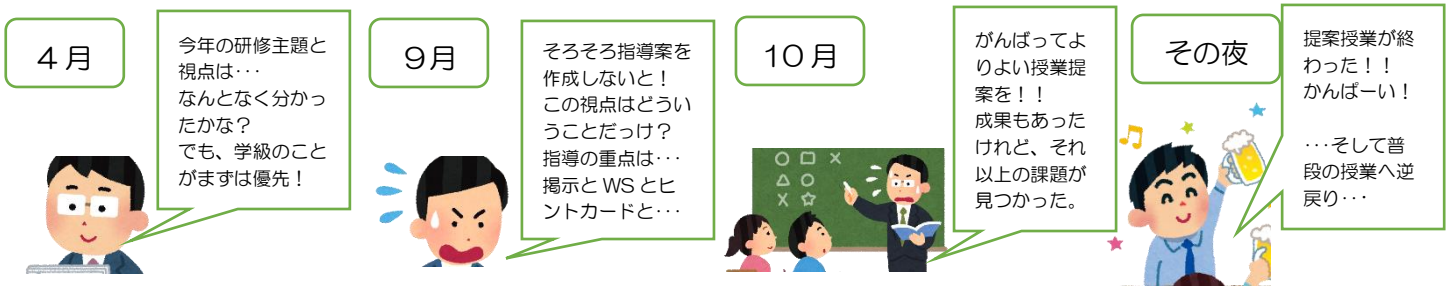
＜令和３年度学力向上市町村教育委員会プラン研究委託事業「拠点校の取組」＞

提案授業はいつ終わるの？？？

黒部市立桜井小学校　研究主任　髙松　知樹

「あ！そういえばそろそろ提案授業だ！！どうしよう･･･。何すればいいんだ･･･」

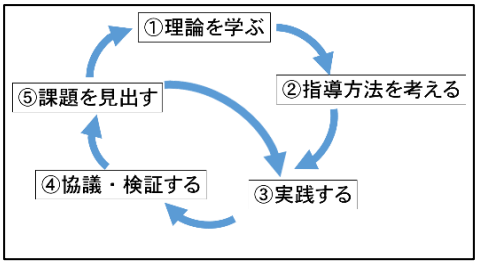
教員になって、毎年懲りずに同じ悩みを抱えてしまう方は少なくないと思います。お恥ずかしい話ですが、私のこれまでの研修に対する取組方は、このような感じでした。



つまり、新たに生まれた課題に対しては、提案授業後の個人の普段の授業を中心に解明に取り組むことになります。これは、なかなか難しいことです。本来ならば、研究として連続して課題解明していく必要があるはずです。しかしながら「今年の提案授業は終わり！！」と言って居酒屋で、疲れと同時に課題もお酒で流してしまったという経験に心当たりはありませんか？

そこで、桜井小学校では、「課題の連続性が保障されるように」「全教員がチームとして授業力向上に向けて実践できるように」研修体制を見直し、以下の２つの取組を行ってきました。

①　ＰＤＣＡサイクルを重視した研修の取組



本校の研修の視点に基づき、６回にわたり、PDCA サイクル（右図）を意識した算数科の授業実践を行いました。その際、指導主事から算数科における自力解決について理論を学び、その学びを実践に生かしました。それぞれの提案授業の事後研修では、課題を明らかにし、次の授業の指導者が、前の互見授業で明らかになった課題の解明に向けて実践できるように連続性のある研修体制を整えました。（課題のバトンを繋ぐイメージ）

また、８月に実施した「自力解決の捉えの共通理解」をねらいとした研修会等、研修を繰り返す中で見えてきた課題に対して、教員のもっている認識を共有し、行動の一元化を図るための研修を行いました。

②　ＯＪＴに基づいた「先輩の授業を見よう」の取組

若手教員の授業力向上を主なねらいとした「先輩の授業を見よう」の取組を行いました。原則、２年目以降の全ての教員が、若手教員に各教科幅広く授業を公開しました。また、授業者は「若手育ては自分育て」の考えのもと、自分の日頃の授業を振り返る機会としました。事後研修では、授業者が学級経営や授業について意識していることや若手教員の普段の悩み等を話題に取り上げ、学級経営と授業との関わりや各教科の教材に対する見方や考え方を捉え直す機会としました。

より詳しく知りたいという方は右の QR コードから富山県教員応援サイトよりご覧ください。（掲載予定）市内の学校の教員一人一人が「明日の授業のためになった」と思える研修にするために皆さんならどうしますか？よりよいアイディアをお待ちしています！

＜令和３年度学力向上市町村教育委員会プラン研究委託事業「拠点校の取組」＞

「学力向上拠点校の取組」としての個人研修

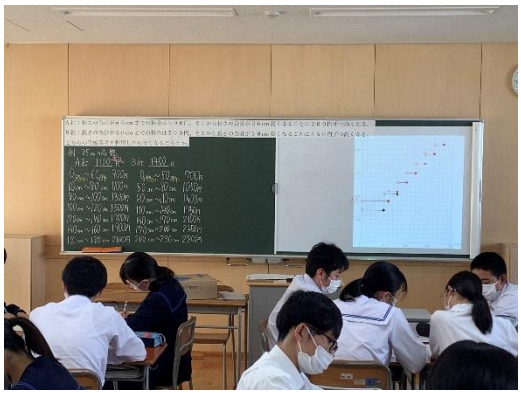
黒部市立明峰中学校　教務主任　上島　範彦

本校は今年度、令和３年度「学力向上市町村教育委員会プラン研究委託事業」の拠点校となった。前年度から、主体的で対話的な学習を通して学びの深化・発展を図る生徒の育成を目指し、分かる・楽しい授業や考えを深める授業に取り組んできた。また、家庭学習の習慣化を図るために、毎週の週末課題を設定し取り組ませてきた。生徒は純朴･穏健で毎日の授業や与えられた課題にまじめに取り組んでおり、概ね良好な成果を収めている。しかしその反面、校内アンケートの結果からは、学習に対する自信がなく、将来の目標に対する意識がやや希薄であるという生徒も見られ、学力向上の土台となる自己有用感や自己肯定感の向上が本校の課題である。これらの感覚は主に他者との関わりのなかで育まれるものであり、授業や学級活動、学校行事等、様々な教育活動において教師が意図的にその場面を仕組んでいく必要がある。

そこで、各教科の授業において話合い活動の充実を継続的に取り組み、対話を通じて多様な考えを認め合うような学びを体験し、異なる立場の意見を知ることで自分の考えがより深化・発展したという実感を味わうことにより、考えることが楽しいと思えるような授業づくりについての研究を進めていき、「学力の向上を目指した、分かる楽しい授業や考えを深める授業の実践」に取り組んでいくことにした。

今年度の研究の方針は、以下の通りである。

- ねらいを明確にした学び合いにおいて、ワークシートやタブレット等のＩＣＴを効果的に活用し、生徒自ら問題を見いだし解決できるようにする。
- 生徒が対話的な学習に取り組み、学び合い活動を取り入れることで、考えることが楽しくなり、自分の考えを深化・発展できるようにする。
- 学び合いの成果を振り返る場を工夫し、生徒が自分の考えや学習が深まったことを実感できるようにする。
- 教員各自が個人研修テーマを設定し、学期ごとの取組を各自の研修としてまとめることとする。



このことにより、本校では初めて全員が各自の個人研修テーマをもち、そのテーマに沿って研修に取り組んでいくこととなった。

１年を振り返ってみると、個人研修であるため自分の研修したいことや今年度の教科の課題等に取り組むことができた。また、課題の設定の仕方や授業展開の工夫、振り返りの実施・質問内容・活用といろいろな研修ができ、教員の授業力の向上につながった。

しかしその反面、各自の研修が中心となり、教科部会や学年会等を開く時間がほとんどなかった。個々の成果や課題を部会で共通理解し、更に互いの研修を進めるための工夫が必要であった。また、それぞれの研修についてまとめるだけでなく、共通理解ができる場をしっかり設定し、同じ内容によりグループをつくるなど、より研修が深まるような工夫が必要であった。来年度個人研修を継続する場合は、教科や同じ研修テーマ等を考えた部会を編成して取り組み、互見授業や部会を実施するなど、研修の進め方を工夫することにより、更に研修を深めていきたい。また、研修会等で学期のまとめを部会ごとに報告することにより、他の部会でも取り入れて実践できるようにして、互いの授業力の向上につなげたい。来年度は統合の３年目となり、すべての生徒が本校入学生となる。ここからがまた新たな明峰中学校を創り上げていく重要な年と考え、さらに努力していきたい。

研修会・各種研究委員会

2学期後半以降に実施しました研修会及び各種研究委員会等について紹介します。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、２月15日（火）の外国語教育企画・運営・評価部会、生徒指導主事等研修会兼いじめ問題等研修会、２月17日（木）の情報教育研究委員会は中止とし、資料のみ配布しました。

【特別支援教育研修会】

〇12月14日（火）

〈対象：特別支援教育コーディネーター　13名〉

東部教育事務所　特別支援教育指導員　米田　亜希子先生を講師にお招きし、「発達障害のある児童生徒の強みを活かす授業づくり・クラスづくり」と題して、ご講話をいただきました。授業や学級での「強み」の活かし方については、「急な予定変更でパニックになる子供」「空気を読まない（読めない）子供」のケースをもとに、弱みを強みに変換した対応の仕方を意見交換しました。参加者からは、「強みを活かすという視点をもつことは、教師のストライクゾーンの広さを発揮するチャンスだという言葉にうなずくとともに、弱みに目がいきがちな日々なので、あらためて子供たちの強みに「おもしろさ」を感じて向き合っていきたいと感じた」「強みを活かす取組を学校でできるとよいと思う。リフレーミングを教員みんなでやりたい」等の感想が寄せられました。米田先生からご紹介いただいた図書(P10に掲載)をぜひご一読ください。

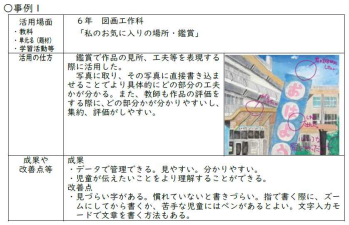
【第２回外国語教育研究部会】

〇12月27日（月）〈対象：外国語教育研究部員、中学校英会話講師　14名〉

来年度の年間指導の作成に向けて、各学校や英会話科等定例会から寄せられた意見をもとに、協議しました。「Enjoy talkingの実施方法や会話例は目的や指導内容に合っているのか」「年間指導計画の中に黒部市の紹介を取り入れられるところはないか」「中学校では配置月や時数を考慮した英会話科の年間指導計画になっているか」等を小・中学校に分かれて協議し、改訂作業を行いました。また、「Picture Card」「This is Kurobe」「英語カルタ」の活用や英語に親しむ環境づくりについても情報交換しました。

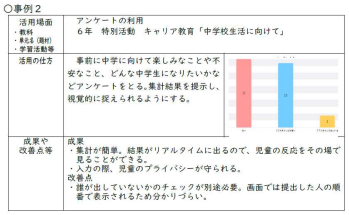
【ロイロノートの各学校における利活用】

第３回情報教育研究委員会（中止）に向けて作成していただいたロイロノートの実践事例を資料として各学校に配布しました。授業はもちろんのこと、授業以外の学校生活や先生方の研修の中で、各学校が工夫しながら利活用しておられることが分かりました。一人一人の能力や特性に応じた「個別最適な学び」と他者との「協働的な学び」の推進に向けて、来年度は情報教育研究委員会で事例を紹介し合い、集まった活用事例が現場の先生方のお役に立てればよいと考えています。



〇事例１

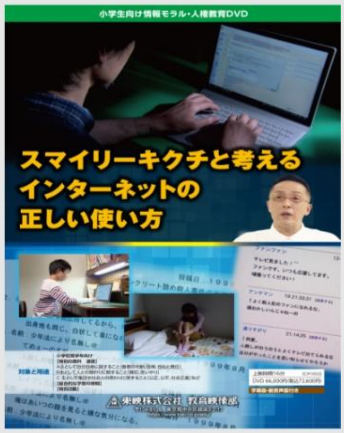
活用場面 ・教科 ・単元名（題材） ・学習活動等	６年　図画工作科 「私のお気に入りの場所・鑑賞」
活用の仕方	鑑賞で作品の見所、工夫等を表現する際に活用した。 写真に取り、その写真に直接書き込ませることでより具体的にどの部分の工夫かが分かる。また、教師も作品の評価をする際に、どの部分かが分かりやすいし、集約、評価がしやすい。
成果や改善点等	成果 ・データで管理できる。見やすい、分かりやすい。 ・児童が伝えたいことをより理解することができる。 改善点 ・見づらい字がある。慣れていないと書きづらい。指で書く際に、ズームにしてから書くか、苦手な児童にはペンがあるとよい。文字入力モードで文章を書く方法もある。



〇事例２

活用場面 ・教科 ・単元名（題材） ・学習活動等	アンケートの利用 ６年　特別活動　キャリア教育「中学校生活に向けて」
活用の仕方	事前に中学に向けて楽しみなことや不安なこと、どんな中学生になりたいかなどアンケートをとる。集計結果を提示し、視覚的に捉えられるようにする。
成果や改善点等	成果 ・集計が簡単。結果がリアルタイムに出るので、児童の反応をその場で見ることができる。 ・入力の際、児童のプライバシーが守られる。 改善点 ・誰が出していないかのチェックが別途必要。画面では提出した人の順番で表示されるため分かりづらい。

新規購入図書・DVD のご紹介

新しい書籍と DVD を購入しました。貸出希望のある方はお気軽に教育センターまでご連絡ください。

スペシャリスト直伝！ 通常の学級 特別支援教育の極意 田中　博司	どうしても頑張れない人たち 宮口　幸治	教育と医学 編集：教育と医学の会 発行：慶応義塾大学出版会
教師と子どもの「困った」を 「笑顔」に変える本 樋口　一宗	発達障がいを持つ子の 「いいところ」応援計画 阿部　利彦	いい教師の条件 諸富　祥彦
授業の ユニバーサルデザイン入門 小貫　悟・桂　　聖	通常授業の ユニバーサルデザイン スタートダッシュ Q&A55 阿部　利彦	DVD スマイリーキクチと考える インターネットの正しい使い方